

ほない歴史通信

第76号
2015.9.1

『大子学のすすめ』を読む

—次代を担う子ども達に何を伝えるか—

今年の四月、大子町教育委員会は『大子学のすすめ—大子で学ぶ大子を学ぶ 大子のために学ぶ—』（以下、『大子学のすすめ』と略）を刊行した。次代の担い手である子ども達に「郷土愛」を育むために今年度から「大子学」という名の授業を新たに設け、その教科書となるのが本書である。この授業は、「大子町で生まれ育つ子供たちが、保護者や地域の温かな人々と交流しながら、体験を通して、地域について学び、地域について発信し、ふるさとに誇りを持ち、さらには、自己の生き方についても考える学習」（二頁）として位置づけられ、義務教育九年間（各学年六時間程度の学習）の体系的な学びを通じて郷土に対する「誇りと愛着」を身につけることを目指している。「少子化」「高齢化」のもとで多様な課題に直面するなか、各自治体は生き残りをかけて工夫を凝らした振興策の展開に余念がないが、地域に向き合う人材をどう育てるかとの視点から大子町がこうした取り組みに着手したことは大いに評価したい。もう少し早くからならば、との思いは免れないが。

さて、その『大子学のすすめ』を一読してみた。町内の小中学校で教鞭をとっておられる九名の教員が編集・執筆されているだけに諸処に工夫の跡が見られ、「大子学」の教科書として子ども達には親しみやすい体裁と記述内容になっているように思われる。工夫の

例を一つ挙げれば、巻末の「児童生徒用学習カード集」がある。学年ごとに、学んだ内容に即した合計四三枚のカードが用意され、学びを単に振り返るだけでなく、自身の思考を深め、高学年の場合には提案力を鍛えるための設問が盛り込まれている。ここに、どのようなことが書き込まれるか興味深い。

ただ、読了して、こうした類いの教科書を編集・執筆することの難しさを痛感すると同時にいくつかの疑問もまた抱いた。例示してみよう。一つは、中学二年生、三年生の扱いである。二年生には「大子町のよさを発信しよう」、三年生には「大子町の未来を提言しよう」とのテーマが与えられているが、その手掛かりとなるべき教材が全く示されていない。なぜなのか。発信するには、未来を考えるには、今の姿を知ることが不可欠である。人口減少、財政問題、働く場の確保等々の直面する課題、それを乗り越えようとする様々な取り組み等、教材に値する事柄はいくらでもあると思うのだが。第二は、教材として取り上げた事項の扱い方である。前述のように、目的は郷土に対する「誇りと愛着」を身につけてもらうこと。であるなら、そこに誘うような記述が工夫されるべきであり、例えば自然環境（三二―四〇頁）、文化財（七四―七七頁）、「大子町俳句ポスト」（八二―八三頁）について紹介するだけでは不十分で、「誇りと愛着」に誘う意味づけが必要ではないだろうか。第三は、限られた授業回数の中で、取り上げる教材をどう選択するかである。先の第一点とも関連するが、大子町が抱える課題なり問題点を、少なくとも小学五年生以上には積極的に提示してよいのではないか。その視点を取り入れた教材の選択が必要だろうと思う。「影」の側面をどう克服するかを問うためにも。

新しい教育実践はスタートしたばかりである。教室内での座学だけでなく、地域に飛び出し、住民の方々と交流し、体験しながら学ぶことも意図されている。教科書の改良とともに、学校と地域が一体となってこの「大子学」を盛り上げ、新たな資質を具えた人材が多数輩出されることを心から期待したい。

（齋藤典生）

大子町・鎮守の杜(五)

花室神社(大子町左貫森山九三二)

高根信和

水郡線常陸大子駅前から国道四六一号で旧上岡小学校を過ぎ、最初の信号を右折して県道二〇五号(須賀川大子線)を走る。大子地方の気温は、摂氏三七度を示していた。初原の集落を通過して左貫に入ると県道の左右には茶園の看板が立ち、茶畑が点在する。大石川と初原川の合流地点は左貫集落の中心で、駐在所や大子佐原郵便局、さはら小学校が建っている。

奥久慈茶の里公園をやや北に進むと、鎮守の森が見えてくる。花室神社である。宿の側に建っている両部鳥居をくぐる。昭和十五年の出羽三山参拝記念に奉納された石燈籠の側に、カヤの古木がある。参道を横切る小川が心地よいリズムの音を立てながら流れ、その上の小さな神橋を渡る。右手にしめ縄が掛けられたスギのご神木、石段を登る手前に大きな石碑がある。立ち止まって見ると、明治四十五年二月、丹誠以下九名の発起人が維新史料編さん委員武田猛(水戸)に依頼し、贈従五位堀江芳之介君記念碑を建立した、とある。

堀江芳之介(一八〇七—一八七二)はここ左貫の生まれ、幕末の勤皇の志士で、水戸に出て藤田東湖の影響を受けた。安政四年(一八五七)に江戸に潜入し、米国公使ハリスを路上で仲間と共に襲って失敗し、江戸伝馬町の牢に投獄された。今NHKで放映中の大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公杉文の実兄、吉田松陰と同じ房で投合し、松陰の遺書である「留魂録」の中で松陰は、芳之介のことを「真の知己、真の益友なり」と評している。後、芳之介は英国公使館焼打事件にも関わった。

十一段の階段を上がると拝殿につく。拝殿は銅板葺、本殿は神明造で屋根は木羽葺、覆屋で保護されている。拝殿右手に神庫があり、神輿が保管されている。また神庫の右手には、逆木神社、琴平神社、皇大神宮、鹿島神社、素戔神社の末社が並んでいる。社伝によると、大同元年(八〇六)に富士山の霊峰から神を迎え祀ったという。長享二年(一四八八)常州佐竹領鍛田村(左貫)の棟札が現存する。例祭は、四月一日、二日である。

祭神は、木花開耶姫命(このはなさくやひめのみこと)である。『古事記』によると、この姫は天津神(あまつかみ)である瓊瓊杵命(にぎのみこと)の妻となり、一夜にして子を宿したため命は怪しみ、お疑いになられた。姫は、命の子であれば無事に生まれると誓い、出入口のない産屋を造り、粘土で塗りふさぎ、火を放って燃え盛る火の中で火照命(ほでりのみこと)、火須勢理命(ほすせりのみこと)、火遠理命(ほおりのみこと)の三柱の御子神をもうけたという故事がある。いつの頃からかは詳らかでないが、左貫の氏子の間には家や倉庫などの建物には土壁を使わない風習が今でも残っており、信仰の深さがうかがえる。子宝、安産、子孫繁栄の社として崇敬されている。

なお、堀江芳之介については、蛭川吉男氏「松陰の真の知己 堀江芳之介」(『大子史林』第二号、昭和四十八年)及び「松陰の真の知己 堀江芳之介(下)」(同第三号、昭和四十九年)に詳しい。



花室神社社殿を望む



堀江芳之介顕彰碑

私の太平洋戦争記（四）

野内泰子

空襲になると外出禁止となり学校も休校となる。交通機関もすべて止まってしまう。当時、自家用車などはどこにもないから緊急の軍用車以外は走らず町はひっそりと静まり、近づいて来る敵機の爆音のみ。そんな中で私は刻々とひどくなるお腹の痛みに堪えていた。吐き気もして、これは、間違いなく盲腸炎だと分かった。何故ならば、これより三月前にも同じ症状を起こし病院で盲腸炎との診断を受け手術はしなかったが、また、起きるかも知れないと言われていたのである。それにしても時機が悪かった。痛みは益々ひどくなり部屋中を転げ回った。母もさすったり冷やしたりする以外にどうしようもなかったのである。父もその日は帰宅できなかった。現代とは違い連絡手段もない時代だったし、たとえ、連絡できたとしても仕事場を離れることはできなかったろう。父はこの時、海軍航空技術廠という横須賀海軍航空隊（飛行場）の隣りにある役所に勤務していたのである。翌日になってやっと空襲警報が解除になった。夜、父が帰宅したが、その時には私の容体は最悪の状態であった。痛みは殆どなくなつたが、同時に意識も混濁状態となっていたのである。勿論、救急車などない。翌朝、父に背負われて電車で横須賀海軍共済病院へ行つた。このあたりでは最も大きく設備も整っている病院である。しかし、病院に着いたとき、もう、意識のない状態で手の打ちようがないといわれてしまったらしい。「そこを何とかしてほしい」と必死に頼み込み、どうなるか分からないがという条件付きで、名古屋からその道の権威の先生に飛行機で駆けつけてもらい、万に一つの可能性しかないという手術をしていただいたのである。勿論、これは、元気になつてから聞かされたことで、その時の私は天空の世

界をさまよっていたようだ。いまから、七〇年前のことである。そして、地上に呼び戻された八二歳の私が今ここにいます。

戦禍に遭つて命を落とされた人も何百万人もおられるが、その時、大病になり手当が間に合わず命を落とされた人も多数に上ると思う。これらの人も戦争の犠牲者と言えるのではないだろうか。私は運良く助かったが、しかし、七〇年を経た今でも、その後遺症とも言える病を時々発症することがある。ともあれ、この時、完治するまでに五〇日以上もかかった。

まだ、病院通いが続いていた頃、八月半ば過ぎの夏休み中だったが学校に招集された。戦争が激化してきたため、小学生の学童疎開が実施されることになったという知らせであった。疎開は集団疎開と縁故疎開とがあり、集団疎開はとりあえず六年生だけということである。愛甲郡（当時）の山の方にあるお寺に行くことになった。六年生は受験のこともあるのいろいろ悩んだが、私の場合は病後ということもあり田舎へ帰ることになった。それで、九月の二学期から両親の故郷である生瀬へ帰り、生瀬第二国民学校へ転校した。多分、六年生は六〇名位ではなかったかと思う。ここでの七ヶ月弱の生活は辛いものであった。ひどいじめにあっていたのである。でも、このことについてはここに書くつもりはない。生瀬に疎開してからは、戦争への恐怖はひとまず遠のいた。父や兄のいない生活は寂しくはあったが、空襲警報のサイレンに脅かされることもなく平穏であった。田舎の家で一人で暮らしていた祖母の所に母と私、三年生の妹と四歳の妹、それに、一歳の弟の五人が引越して来たので、大きな家も急に賑やかになった。私達が田舎に疎開してきて間もなく、父は海軍省に転勤になり霞ヶ関へと職場が変わつたので東京に引越し、兄と二人で新橋に家を借りて住むことになった。今のように各戸に電話などのある時代ではないから通信手段は専ら手紙である。（続く）

（大子郷土史の会）

中心市街地の護岸

大金祐介

大子町の中心市街地のすぐ東側を流れる久慈川は時として洪水を引き起こすことがある。そのような時、洪水から中心市街地を守っているのが護岸である。現在、中心市街地の久慈川沿いにはほぼ全面にわたって護岸が整備されているが、今回は、その中で最初に整備された護岸、すなわち金町の榊材木店駐車場裏（旧十一屋金物店裏）から松沼橋までの区間の護岸について取り上げたい。なお、本稿の執筆に際しては、大子町長益子彦五郎の回顧録『最近大子記事第一号并二余町長ノ事績』（『大子町史資料編下巻』所収）などの資料を参考にした。

護岸誕生のきっかけは、明治二十三年八月七日の久慈川の大洪水だった。この時、大子村大子付近における久慈川の水位は二丈二尺（約六・七メートル）に達し、大子村では太田警察署大子分署をはじめとする一三家屋が流失、二百五十余戸が浸水した。横谷河原、瀬戸田、岡本は、一面海上のようになったという。また、溺死者は四名、溺死飼馬は二頭、田畑の被害は約三六町歩（約三十六ヘクタール）、道路の被害は約千五百間（約二千七百二〇七メートル）、橋梁の流失は二〇箇所に及んだ。さらに、治水上、風致上の理由から、金町から泉町にかけての久慈川沿いに植えられていた樺の一部を残してすべて流失してしまった。流失した樺の中には幹周りが二丈（約六メートル）に達するものもあったようで、この時の大洪水のすさまじさがうかがえる。なお、この時の大洪水は大子村以外の保内郷の村々にも甚大な被害を与えた。この時の被害として特に知られているのは、水戸藩の時代に宮川村矢田に整備された保内郷四十余村のお稗倉（郷倉）六棟が備蓄の稗千八百俵もろとも流失してしまったことである。

この久慈川の大洪水によって甚大な被害を受けたため、大子村では洪水対策が実施されることになった。その洪水対策こそ護岸の整備だった。

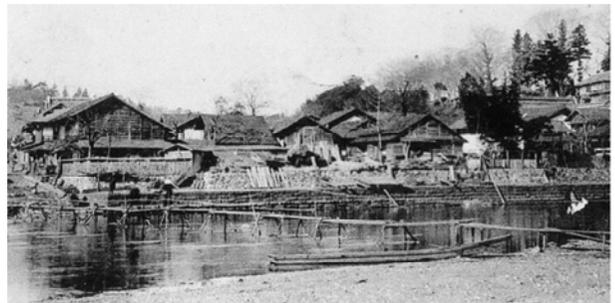
護岸の設計は茨城県技師兼内務部第二課長関屋忠正、工事監督は茨城県内務部技手伊澤貞一郎、施工は大子町の堀江佐吉だった。護岸は、外側は石垣、内側は厚さ二尺（約六〇センチメートル）のコンクリートという具合に、石垣とコンクリートの二重構造になっていた。極めて堅牢な造りだった。護岸の整備には約千七百円を要したが、県が全額を負担した。

護岸は、明治三十四年九月二十九日に落成した。同日、大子町は落成式を挙行し、久慈郡長丹誠が来賓として出席した。落成式の余興として、

花火、相撲、屋台巡行、手踊りが行われた。この時に落成した護岸は、金町の榊材木店駐車場裏から松沼橋までの区間の護岸である。その後、中心市街地の久慈川沿いには、順次、護岸が整備されていった。それらは、適宜、改修や拡張を施されながら、今日に至るまで洪水から中心市街地を守っている。

中心市街地の護岸は、これまで歴史的建造物として注目されることがほとんど無かった。しかし、護岸は、今回、取り上げたように百年以上の歴史を持つれっきとした歴史的建造物である。今後は、中心市街地の他の歴史的建造物と共に、護岸も中心市街地の活性化の素材として積極的に活用されることを希っている。

（筑波大学人文・文化学群人文学類四年）



中心市街地の護岸（昭和初年）

大子町産出の化石の紹介（中）

笠井勝美

新生代中新世の初期（一八〇〇万年前）、大子町付近は鷲子山塊を中心とした湖沼や低地があり、そこに植物等が堆積したり、陸上動物の歩いた足跡が残されました。その後世界的な海進の時代に入って、大子町も海底に沈み、その上位に海棲の動植物が堆積しました。

二 新生代の産出化石

大子町の中新世の地層は、下位より湖などで堆積した栃原凝灰岩層、北田気層、浅川層の下部から中部の陸成層、海底で堆積した浅川層上部、男体山火山角礫岩、苗代田層、小生瀬層、内大野層の海成層から成り、その化石産地は表の通りです。小生瀬と内大野層の堆積した海は深くなり、日本海まで海が広がっていたと考えられています。

（一） 鎌倉館の植物化石

この植物化石は、上金沢鎌倉館北側から産し、メタセコイア、ヤマモモ、クワ、クリ、ケヤキ、ヤナギ等、二十属、二十五種以上の種類を産し、金沢植物群と呼ばれています。この時代は、温暖な気候であったことを示す種類が多く含まれています。鎌倉館と同じ化石は、大子町では長岡や北田気等の多くの北田気層の中から産出しています。

これからの化石の中でも鎌倉館のヤマモモ化石は、明治二十一年（一八八八）、外国の学会で報告され、鎌倉館の植物化石は国内外で有名になりました。

メタセコイアの化石は、日本中から産しますが、メタセコイアそのものは地球上から絶滅したと考えられていましたが、昭和二十年、日本人によって中国四川省で自生しているのが発見され、



亜熱帯を示すフウの化石

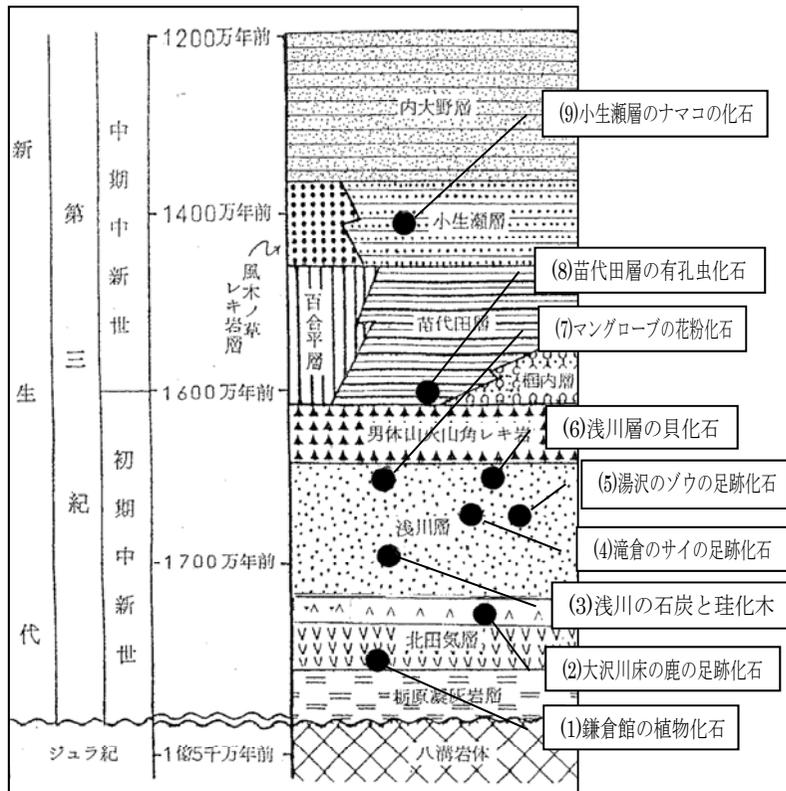


メタセコイア



ヤマモモの化石

大子町の中新世の層序と産出化石



生きた化石としてニュースになりました。実から育てた最初の苗木は、現大子清流高校の前庭に大木となって現存しています。尚北田気層の植物化石は、大子町教育委員会で保管しています。

相撲あれこれ

会沢晴美

「三十年ぶりに大相撲開催」、平成二十七年三月の「広報常陸大宮」（常陸大宮市）が伝えていた。友人夫妻は、成長された息子さんに招待され見物して来たという。有名力士が多く来場し、他県からの見物客も多く、特に土俵近くでは入場料は数万円であったという。

七十数年前、大子小学校の児童であった私は、先生に引率されて、松沼のグラウンドへ向かった。有名力士の地方巡業の相撲大会を見学に行ったのだ。ラジオもテレビもない時代、写真や雑誌で知った力士の相撲が見られると、みんなは大よろこびだった。

当時の松沼は、袋田村であったが、久慈川を渡る板橋の先に、広々とした空き地が町民グラウンドだ。中央に土俵がつくられ、そのまわりに見物の人々が集まっていた。

幼い女子児童の私は、力士の名も、その強さも、理解できなかったが、初めて本物のお相撲さんを、目を見開いて見つめていた。

近年になって聞いた橋のたもとに住むHさ

んの言葉が忘れられない。「当時の松沼橋は、棒杭の橋桁の上に、厚板がつながってのせてあるだけ、この板橋を巨体の力士が、のっし、のっしと渡ったけど、橋はびくともしなかったのに驚いた」。

昭和十二年一月十七日付の「いはらき新聞」に「玉錦一行大子へ 保内郷商工団体聯合主催の横綱玉錦、大関双葉山、鏡岩一行百六十名、東京大相撲は来る旧正月月中旬大子町グラウンドで盛典一日の興行を催すことゝなつたが、各加盟商店では特別御招待券つき謝恩大売出しを行ふ」。

昭和十二年一月二十四日付の「いはらき新聞」に「大相撲興行 旧正月四日 横綱玉錦、大関双葉山、鏡岩一行の大子町における興行は来る旧正月四日（二月十四日）に決定した。右の古い新聞記事によれば大子町グラウンドで大相撲が開催されたのだ。夢のような想い出なので確認できなかったが、あれは事実であった。その後同級生に聞くと馬市場でも大相撲があり見物したという。料金を払った記憶がないから児童たちは無料であったのだ。」

その後、国策であったのか、大子小学校の築山の裏に土俵がつかられ、体育の授業に使われた。女子は、押し出し相撲などをしたが、男子は本気になって楽しんだ。近隣の小学生との対抗試合もあり、隣の石井村（現矢祭町）の小学生との試合も行われた。女子は、応援の声を張り上げた。

しかし、戦争がきびしくなり、土俵のあったところには、教室の暖をとる火鉢や暖飯器で使う木炭を焼く炭窯が築かれた。私たちは、テントヤマの裏側にあった学校林から丸太を背にして木炭の材料を運んだ。

こうして、学校から、相撲は消えた。

（常陸大宮市諸沢在住）



大正の面影をつたえる久慈川風景
—小久慈のモダンな吊橋と松沼の一本橋、馬市場—
(大字大子 小崎栄蔵氏所蔵)

当時の松沼の一本橋（『大子町史研究第十号』所収）

「生瀬の乱」研究のあゆみ

昭和四十年(一九六五)に、大子町小生瀬出身の東京教育大学教授、肥後和男が「生瀬の乱のこと」(茨城県史研究 第二号)を発表して一六〇二年(慶長七)の事件と推定しました。それから五〇年の間にさまざまな研究論文が発表されました。「生瀬の乱」があつたという人もいれば、なかつたという人もいます。「あつた」とすれば、それは何時のことであつたのか。それに関する時期の特定に関わる記述を抜粋し、紹介しましょう。

また、「生瀬の乱の史料がありますか」という問い合わせがよくあります。一六〇二年とも一六〇九年とも言われる「生瀬の乱」は、口から口へ、伝承として伝えられてきました。それが、約二百年後、一八〇七年(文化四)に高倉胤明の「探旧考証」や一八五五年(安政二)に加藤寛斎の「常陸国北郡里程間数之記」(生瀬乱之由来、里人説)などが書かれます。地元の史料、「大藤家由緒書」や「覚書」、伝承などをもとに活字化されたのです。

一、**肥後和男「生瀬乱のこと」**(『茨城県史研究第二号』昭和四十年)

「この乱の年代については、慶長七年、同十四、元和三年、同七年という四説があつたことになる。この中、元和説はどうも怪しいようで結局慶長七年か、十四年かということになる。…万千代の時代の出来事とすれば慶長七年十月以外にはないことになる。」(四九ページ)

二、**益子公朋「生瀬乱再考」**(『大子町史研究第八号』昭和五十五年)

「この事件は、計画性をもたない、単なる偶発事件であり、百姓一揆とは異質のものであると言わざるを得ない。…この事件の背景には佐竹の秋田移封、水戸藩の草創期といった、権力交替に伴う政情不安が介在していたことを否定する訳にはいかない。とするならば、交替から七年も経過した十四年説をとるよりも、国替直後の七年十月発生の方が、より自然のように思われてならない。」(三一

ページ)

三、**高橋裕文「保内の農民騒動(上)」**(『大子町史研究 第十三号』昭和六十年)

「水戸藩側の芦沢伊賀存命中の公式文書の慶長十四年(酉年)と、地元の言い伝えの酉年の十月十日の酉年という点で一致するので、事件は慶長十四年十月十日に起きたということが出来る。…慶長十四年十二月十二日に領主の頼宣が突然、駿河遠江二州五十万石に替えられたのも、理由にはつきりしないが小生瀬村の成敗と関係あるのではなからうか。」(八〇ページ)

四、**藤田雅一「生瀬一揆」論序説**(『茨城史学 第三十号』平成七年)

「『生瀬一揆』が、語られた場についてである。肥後氏によれば、この伝承は十月十日の『刈り上げ』を場として語られてきた。…このハレの日に、『この行事からんで昔話がかきされた』のである。…この事件に多くの興味が示された文化年間に、優秀な研究者がその伝承の取り扱いを誤ったことは確認できたのではないだろうか。どのように考えても『生瀬一揆』の存在を断定できる状況ではなかつたのである。」(七〇ページ)

五、**野上平「生瀬乱」年代考(下)**(『茨城史林 第三十一号』平成十九年)

「生瀬乱は慶長七年佐竹氏最後の夏年貢徴収過程に起こつたものと判断される。また山方乱もほぼ同時期、生瀬乱と同じ理由、すなわち多くの農民が年貢を『国去り行く』領主に納めることの不合理をついて、抵抗したものと考えられる。…各地に残る『生瀬浪人』伝説などから、殺害されたのは責任ある農民を中心とした一部村民で、大多数の村民は村外に逃亡したものと見られる。」(三六ページ)

「生瀬の乱」研究のあゆみ、「史料」を参考に、これからも、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。(野内正美)

こんにやくの神様 (二)

私の高祖父のコンニャク栽培研究 (種の貯蔵と管理)

私の高祖父の菊池勝次は、コンニャクを栽培する上で大切なことを「蒟蒻栽培三大要素」として研究報告書に記している。今回は、その中の一つである種の貯蔵と管理について紹介したい。

勝次は、「標準風干された種いもは十一月下旬には寒氣到来によって、火棚（ヒダナ）又は火室（ヒムロ）に移され、容器の使用をしたものと、バラ積貯蔵とが保管の具合や管理によって、来春の発芽成績に大きく影響するから貯蔵については特に注意が必要である」と述べている。

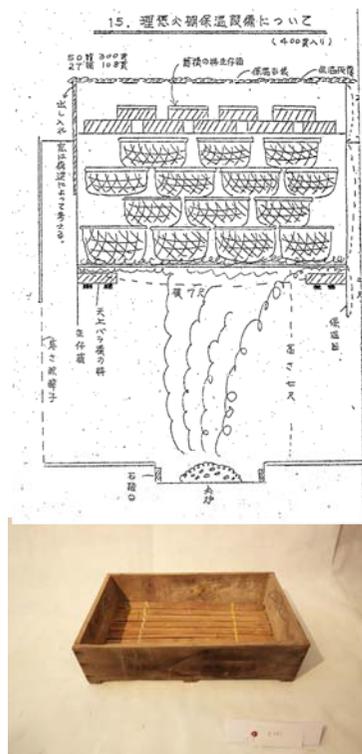
生仔（キゴ）と呼ばれる種いもの貯蔵には、貯蔵箱が必要だったらしく、「縦二尺横一尺三寸高さ五寸、底を竹箆として、四―五貫目宛入れている。又魚空箱を求め底を細板スカシ張りとするもよい。必ず底部より、温度、湿度が通過する様に工夫する。又火棚に二年生以下の種子をバラ積みする時は図解（下の図解参照―引用者）に示す如く火棚下方温度圏の内方に置くを良しとするも、大量生仔貯蔵に適しないから大量貯蔵せんとする場合はバラ積の中央に温度上昇筒を造り温度の上昇を図れば上方が良い結果を得る事が出来る。火棚下方に生仔貯蔵する時は極寒時零下三―四度に低下するから充分注意を要する。火棚籠積の場合は籠間の間隙が多いので、空気の移動が良いため、温度湿度はどんどん上昇するので上部程暖かく生仔貯蔵には最も良い場所と云う事になるから籠積上部に台を造り生仔箱を並べる。棚上げしてから寒気が烈しくなれば板や古俵等を掛けて上昇温度がにげないようにして暖かい場所となし冬眠せしめることである」と記している。

ここで述べている貯蔵箱は現在まで保存されており、国の登録文化財となっている。現物を通して、コンニャク栽培の努力と当

時の厳しい自然環境との戦いを知ることができる。(続く)
引用・参考『蒟蒻栽培の研究』(昭和二十九年五月発行)

(家田 望)

図解 理想火棚保温設備について



勝次の造った貯蔵箱 (ドンゴイレ)

編集後記

町史編さん事業を陰で支えた井上和司さんが、七月から大子町歴史資料調査研究員の一人に加わりました。井上さんには、町史編さん時に蓄えた知識や資料の扱い方等のノウハウを活かして、今後とも町の歴史文化行政を盛り上げて欲しいと思います。

(家田 望)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

野内 正美 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

齋藤 仁司 (大子町教育委員会)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館 ☎ 0295 (72) 1148